祝祭の組織編成にみる都市性と継承性

—「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」における参加集団の分類と特徴—

矢　島　妙　子

はじめに

「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」は1992（平成４）年に始まる北海道・札幌の祭りで、現代都市の新しい祭りである。祭りとはいっても基本的には踊りのみが行われている。鳴子と呼ばれる和楽器を手にすることと、「ソーラン節」（アレンジ可）を１節でも入れた曲で踊ることがルールであり、その他に踊りの種類や音楽や衣装については規制がない。

「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」での踊り子は一般公募によって集められることが多く、自分が好む踊りをするチームを選択して踊り子となる。

本稿では、多様な意図のもとに集団形成をされたチームの事例から、「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」における参加集団の分類と特徴にみる都市性と継承性について考察したい。

１.「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」の概観

北海道大学の男子学生が高知の「よさこい祭り」[1]を参考にして始めた祭りである。主催はＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り組織委員会である。現在の開催期間は６月上旬から中旬の５日間で、札幌市内の30数カ所の競演場で踊る。ステージとパレードの２つの形式があり、パレード形式では「地方車（じかたしゃ）」と呼ばれる音響設備を搭載してさまざまな装飾を凝らしたトラックのあとを踊る。

2001（平成13）年の第10回には、408チーム、約４万１千人の踊り子が参加した。観客動員数は201万人、また経済効果も206億円といわれる。若者が運営や踊

り手の中心となってはいるものの、若者だけの祭りではなく、踊り子の年齢層の幅は広く、見物する側にも年配者が多く見られる。また、「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」に影響されて全国で約70の「よさこい」系の祭り（原則として鳴子を手に持ち、地元の民謡などを取り入れた曲に合わせて踊る祭り）が誕生している。

表「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」の推移

		第１回(1992)	第２回(1993)	第３回(1994)	第４回(1995)	第５回(1996)	第６回(1997)	第７回(1998)	第８回(1999)	第９回(2000)	第10回(2001)
参加数	チーム数	10	26	25	48	108	183	280	333	375	408
	人　数	1,000	2,500	3,000	4,800	10,800	18,300	29,000	34,000	38,000	41,000
参加地	道　内	４市町村	５市町村	９市町村	17市町村	55市町村	107市町村	137市町村	168市町村	174市町村	187市町村
	道　外	２都県	２都県	２都県	４都県	５都府県	11都府県	11都府県	18都府県	24都府県	32都府県
会　場　数		３会場	６会場	６会場	７会場	12会場	16会場	26会場	30会場	30会場	33会場
観　客　数		20万人	44万人	58万人	76万人	107万人	138万人	180万人	193万人	182万人	201万人

２．結合契機によるチームの分類とその特徴

「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」ではチームを形成する原理は多様であり、多様な縁で集団編成が可能である。一般に募集の方法は、口コミ・ポスター・タウン紙・インターネットなどが用いられる。自分の好みのチームを選んで、数千円から数万円の参加費を払って踊り子となる。その際にオーディションを行うところもある。衣装代、鳴子代などは別途徴収されることが多い。

チームはその結合契機により、一般チーム、企業チーム、企業・大学生合同チーム、学生チーム、そして地域チームなどに分けられる[(2)]。

(1)　一般チーム

踊りたいという友人数名が呼びかけて仲間を募る。仕事仲間、飲み仲間などである。その一部をあげると次のようになる。

①「ｌａｂｏｒ（れいばー）」：1996年～。札幌市。職業安定所の仲間中心で結成し

たのが始まりである。衣装の法被の背中に「衆」の象形文字がある。平均年齢は25歳である（平均年齢については2001年のデータ、以下同じ）。

② 「手鼓舞（てこまい）」: 1997年～。苫小牧市。既存のチームから抜けた人が結成した。「こじめ」という太鼓（太鼓と鼓の中間のような形状の楽器）を使い、バチで叩きながら踊る。平均年齢は30歳である。

③ 「札幌　男気流（さっぽろだんきりゅう）」: 1998年～。札幌市。メンバーは男性だけである。「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」は全体的に女性の参加が多く、踊り子の約７割が女性であるため、このチームの登場は注目を浴びた。振り付けも特徴的で、殺陣を入れる。既存のチームから抜けた人が結成した。平均年齢は25歳である。

④ 「祭響スコブル（さいきょうすこぶる）」: 1998年～。札幌市。水芸や南京玉簾を使用して旅芸人風の振り付けをする。それまで他のチームの振り付けをしていた女性が自分のチームを持ちたいと結成した。平均年齢は28歳である。

⑤ 「ＷＥＢＭＥＮ（うぇぶめん）」: 2000年～。札幌市。インターネットを通じて知り合った仲間により結成された。本名ではなくハンドルネームで呼び合い、練習の情報もインターネットで送り、練習に参加できない人には振り付けも画像で送る。平均年齢は26歳である。

⑥ 「道～ＤＡＯ～（たお）」: 2001年～。札幌市。既存のチームが事情により存続できなくなったため別名称で再結成した。美容師やその常連客、看護婦が中心となる。平均年齢は24歳である。

⑦ 「天晴末広∞梅津屋社中（あっぱれすえひろがりうめつやしゃちゅう）」: 2001年～。札幌市。「祭響スコブル」の中心人物が新たに別の種類の踊りをするチームとして結成した。平均年齢は30歳である。

(2) 企業チーム

企業名は掲げていても踊り子は部外者の場合が多い。これは練習のための時間がとれない、また祭り当日は業務を休めない企業が多いためである。

① 「ＪＡＬ極楽とんぼ（じゃるごくらくとんぼ）」: 1995年～。札幌市。ＪＡＬが一般から募集して結成したチームである。平均年齢は29歳である。

② 「DoCoMo OLE!OLE!YEAH!YEAH!（どこもおれおれやーやー）」: 1996年～。札幌市。ＮＴＴドコモが一般から募集して結成したチームである。平均年齢は25歳である。

③ 「á・la・collette？4 プラ（あ・ら・これって？よんぷら）」: 1996年～。札幌市。すすきのに位置するファッションビル「４丁目プラザ」がスポンサーである。一般募集で、入るに際してオーディションがある。若い女性を対象としたファッションを扱うので、踊りは女性美・優雅さを表した洋風の踊りである。平均年齢は24歳である。

④ 「wamiles 踊り子隊　美翔女（わみれすおどりこたいびしょうじょ）」: 1997年～。札幌市。踊り子が内部の者のみという「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」では例外的なチームで、「ワミレス化粧品」というところが経営するエステサロンが持つチームである。踊り子は社員とエステサロンの会員である。平均年齢は33歳である。

(3) 企業・大学生合同チーム

資金を企業が負担し、大学生が踊る。踊り手が欲しい企業と資金が欲しい学生とは相互補完の関係にある。「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」全体では、大学生のチームは20チームあるが、そのうち企業がスポンサーとなっているものは約半数である[(3)]。

① 「パスキー＆北海道医療大学（ぱすきーあんどほっかいどういりょうだいがく）」: 1994年～。札幌市。「パスキー」とは消費者金融会社である。踊り子は社会人（パスキーの社員と大学生ＯＢなど）と現役大学生で構成される。現在は社会人４に対して、大学生６の割合である。平均年齢は20歳である。

② 「コカ・コーラ　札幌国際大学（こかこーらさっぽろこくさいだいがく）」: 1994年～。札幌市。踊り子は札幌国際大学の大学生である。札幌国際大学は元が静修女子大学という女子大だったため、現在も踊り子はほとんどが女性である。平均年齢は20歳である。

(4) 学生チーム

①「北海道大学“縁”（ほっかいどうだいがくえん）」: 1999年～。札幌市。北海道大学の学生中心だが、他大学や専門学校生も含んでいる。平均年齢は19歳である。

②「稚内市立稚内南中学校（わっかないしりつわっかないみなみちゅうがっこう）」: 1993年～。稚内市。この中学の３年生が踊り子となる。教育活動の一環として学校全体で取り組んでおり、毎年新３年生に、背中に「学び座」と書かれた衣装の法被が受け継がれる。「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」が誕生する以前からロック調のソーラン節で踊っていたもので、「南中（なんちゅう）ソーラン」と呼ばれる。鳴子は持たずに踊る特別なチームで、審査の対象外である。1994年と2001年は参加していない。

③「旭川末広北小学校（あさひかわすえひろきたしょうがっこう）」: 1998年～。旭川市。「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り組織委員会」が学校教育用に制作したオリジナルの曲・振り付けの「教材用ソーラン」で踊る。2001年は参加していない。

(5) 地域チーム

その地域の居住者が中心となってチームが結成されるが、地域を基盤としながらさらにその結合形態の展開もみられる。

① 地域密着型

・「平岸天神（ひらぎしてんじん）」: 1993年～。札幌市豊平区平岸。この地従来の「平岸天神太鼓」に続く郷土芸能として「平岸天神ソーラン保存会」をつくって活動している。漁師をイメージした和風の衣装と踊りである。４つのＳ（スピード、シャープ、ストロング、スマイル）をモットーにしている。大賞を４回、準大賞を２回受賞している人気チームである。平均年齢は26歳である。

・「三石なるこ会（みついしなるこかい）」: 1994年～。三石町。漁業、牧畜、馬の生産や製材業などに携わっている主婦が中心となる。平均年齢は46歳である。

・「乱舞童（らんぶどう）」: 1995年～。白老町。白老八幡神社の宮司が始めた。この神社の例大祭でも踊る。平均年齢は26歳である。

・「新琴似天舞龍神（しんことにてんぶりゅうじん）」: 1996年～。札幌市北区新琴似。新琴似は屯田兵が開拓した地であり、踊りも開拓魂を表現する（詳細後

述)。平均年齢は29歳である

- 「清田フレンズ（きよたふれんず)」: 1996年～。札幌市清田区。地元有志が中心となって呼び掛けて結成した。正調風のソーラン節にこだわり、“和”を基調としている。一方、パラパラ調の踊り、「ＫＩＹＯパラ」も観客をも含めて皆で楽しめるように創作している。平均年齢は29歳である。
- 「石狩流星海（いしかりりゅうせいかい)」: 1997年～。石狩市。“石狩の海と鮭の一生”がテーマで踊りの型を原則として変えない（詳細後述)。平均年齢は25歳である。
- 「北見ＹＯＳＡＫＯＩチーム薄荷童子（きたみよさこいちーむはっかどうじ)」: 1997年～。北見市。特産の薄荷の匂いをしみ込ませた衣装で踊る。平均年齢は29歳である。
- 「響（ひびき)」: 2000年～。札幌市北区新琴似。先にできていた「新琴似天舞龍神」に次ぐ新琴似のチームとして結成された。家族参加が多い。平均年齢は20歳である。

② 地域と企業

- 「蒼天爛華 and 富士建材（そうてんらんかあんどふじけんざい)」: 1998年～。千歳市。チームと地元の企業が結びついた例である。この企業はスポンサーではなく大口協賛である。山伏風の衣装で踊る。平均年齢は28歳である。

③ 地域と大学

- 「札幌学院大学・文京台（さっぽろがくいんだいがく・ぶんきょうだい)」: 1998年～。江別市文京台。札幌学院大学のある江別市文京台の地域住民と大学生が中心となる。大学生以外が半数以上である。平均年齢は21歳である。

④ 地域チームと近隣区の大学チームのジョイント

- 「清田フレンズ＆札幌大学（きよたふれんずあんどさっぽろだいがく)」: 2000年のみの参加である。札幌市清田区の地域チーム「清田フレンズ」と隣の豊平区にある「札幌大学」がジョイントして、「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」で2000年から始まった「正調ソーラン節部門」の踊りに出場した。

一般チームの例でみられたように、既存のチームから抜けた人が新たなチーム

を結成をすることも多い。理由は、チームの踊りに対する取り組み方に賛同できなくなるなどである。例えば、賞ねらいばかりが嫌になったとか、逆に賞をねらうほどのチームになりたいとか、あるいはまったく違った種類のチームを作りたいなどである。

また、大学生の中には北海道ではそれぞれの自分の大学のチームに属しながら、他地域の「よさこい」系の祭りに、大学の枠を超えて遠征専用のチームを新たに結成することもある。仙台の「みちのくＹＯＳＡＫＯＩまつり」（1998年～）には「ＢＯＴＣＨ（ぼっち）」というチームが初回から2000年まで参加していた[4]。名古屋の「にっぽんど真ん中祭り」（1999年～）には、「ＺＥＡＬ（じーる）」という北海道大学と藤女子大の学生中心のチームが2001年に参加している。

つまり、踊り子たちは、いろいろな参加動機、そしてさまざまな結合契機でチームを編成している。既存のチームから抜けて新たにチームを作ったり、大学生の例にみられるように複数のチームに所属したりする。

このようにして編成されたチームは、そのチームの独自性を表出しようとする。他のチームとの違いを強調しようとし、男性だけのメンバーで殺陣の振り付けをするチームや、インターネット仲間のチームや、水芸をしたり南京玉簾を使用するチームなどが最近登場している。また、地域チームも、地域の居住者だけでなく、企業や大学と結びつく例が近年みられる。

そしてチームの独自性はそのチームの「型」となり、定着しつつある。例えば、「“洋”の『ア・ラ・コレ』、“和”の『平岸』」という言い方がある。企業・大学生合同チームの踊り子の中には、その踊りで進路（大学）を決定した人もいるほどである。

全体的にも「型」ができているチームが多いなかで、ここ２年ほど、特に地域密着型のチームにおいて、その踊りを「続けたい」「伝えたい」という言葉が頻繁に聞かれるようになってきている。

３．地域密着型チームの事例

では、ここでその地域密着型チームの２例について報告したい。

(1) 「新琴似天舞龍神（しんことにてんぶりゅうじん）」

このチームは「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」には1996年（第５回）から出場している。1996年（第５回）新人賞、1998年（第７回）優秀賞、1999年（第８回）第３位、2001年（第10回）第３位の受賞歴がある。また、ジュニア部門の「新琴似子龍隊（しんことにこりゅうたい ）」は北海道深川でのジュニア大会で４年連続グランプリを受賞している。

所在する札幌市北区新琴似は、明治期に屯田兵が入植して作られた町で、農地として開発された場所が札幌市の人口増加で宅地化された。人口７万人である。新琴似と新琴似西に町内会が分かれる。町内ごとの夏まつりなどはさかんであったが新琴似全体の祭りやイベントがなかった。1995年の「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」を見た新琴似在住のＩ氏らがこの年12月に仲間８人で発足したものである。

人気チーム「平岸天神」の“天神”に対抗して“龍神”、北区なので「北舞龍神」も考えたがより広く“天”とし、「天舞龍神」」に決め、頭に地域名の新琴似を付けた。

現在のメンバー数は170人で女性が８割である。小学生以上が条件である。ジュニア隊「新琴似子龍隊（しんことにこりゅうたい）」（小学生・中学生、1998年に結成）と、シニア隊「新琴似拓魂（しんことにたっこん）」（40歳以上、2000年に結成）もある。全体の年齢は６歳～60歳で、親子三代の参加もある。平均年齢は29歳である。本祭出場の150人[5]は練習出席率８割以上の人となっている。

チームのコンセプトとして、「地域の活性化」「青少年の健全育成」「感動の共有」をあげている。子どもが踊り子として参加するには親も踊り子かスタッフとして参加することを義務づけている。子どもを人に任せきりにしないためである。

踊りは開拓魂をイメージし、“和”を強調し、着流しの着物を着、編笠を使用する。

衣装、振り付け、地方車は新琴似居住者に依頼している。曲はメンバーの知人で札幌市豊平区在住のプロに依頼している。演奏の三味線は津軽三味線（仙台在住、メンバーの知人）、太鼓はメンバー５人である。歌は新琴似在住の民謡の先生の弟子で、隣接する石狩市花川在住の女性（素人）である。

年間運営費は約1,000万円で地元協賛金を得ている。現在、地元の商店・病院・個人ら約600 件が協力している。

年間活動として年100 回ほどの「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」以外での活動がある。地元新琴似の祭り、主に夏祭りにも10回ほど参加している。また、地芝居の新琴似歌舞伎にも出演している。道内ではさまざまなイベントや祭り、道外では主に「よさこい」系の祭りへの参加している【写真①】。

写真①「新琴似天舞龍神」
（2001年、於：新琴似会場）

(2) 「石狩流星海（いしかりりゅうせいかい）」

「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」には1997年（第６回）から出場している。1998

年（第７回）優秀賞、1999年（第８回）優秀賞、2001年（第10回）準大賞を受賞している。

所在する石狩市花川は札幌市のベッドタウンで、働く人のうち８割が札幌市内に勤務する。1996年に石狩町から石狩市になった。人口５万５千人である。この地域は北海道内のさまざまな地方の人が集まった新興住宅地で、これといった祭りがなく、1996年の「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」を見て、母親14人と子ども４人で結成した。この年の７月７日の地元「七夕まつり」で踊りを初めて披露した。七夕にデビューしたので、流れ星のイメージで「流星」、そして石狩の「海」、頭に地域名を付けて「石狩流星海」とした。

現在のメンバー数は150人で女性が８割である。入るに際しての条件はない。家族参加が多く、親子三代の参加もある。全体の年齢は３歳～58歳で、平均年齢は25歳である。

チームのコンセプトは特に掲げてはいないが、「地域住民との親睦」「活気あふれる街づくり」がモットーである。

「石狩の海と鮭の一生」がテーマで、毎年ほとんど踊りの型を変えないのが特徴である。これは石狩を出ていった子どもたちがいつ帰ってもまた踊れるような、「盆踊り型」の踊りを目指しているからである。年齢により、イクラ／稚魚／成魚／ほっちゃれ（産卵のため川に戻ったメス）に分かれて踊る[6]。鮭の絵のついた法被と編笠を使用する。

衣装、振り付け、地方車は石狩市居住者に依頼している。曲はメンバーの知人、札幌在住のプロに依頼している。演奏は太鼓はメンバー（北響太鼓）、歌はチームの代表である。

年間運営費は約 400万円で、踊りが制限されるのを好まないため、スポンサーはあえてつけない。

年間活動として、年50回ほどの「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」以外での活動がある。道内が主で、その中でも石狩市内の活動が多い。地元の商店街の祭り、神社の祭りなどに参加している。その他、病院や老人ホームの慰問などを行っている【写真②】。

写真②「石狩流星海」
（2000年、於：大通パレード南コース）

4．考察

地域密着型としてあげた２つのチームは、地域性をチームの独自性として強く表出し、地域内の祭り・イベントに参加する一方で、「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」での上位入賞を果たす人気チームとなり、他地域の多くのイベントにそれぞれの地域を代表するチームとして参加している。内的にも外的にも認められた存在となっている。

また、どちらも子どもをチームのメンバーとして大事にし、次世代のことを考えている。回を重ねるごとに、この踊りを「続けたい」、そして次の世代にこのチームの独自性を「伝えたい」という意識が出てきている。親子三代の参加もあり、それは同時期に三世代が同じ文化を共有しているということである。

また、すでに述べたように、それ以外のチームにおいても、地域性に限らず、

そのチームの「型」を創り出してきている。一般チームにおいても、最近では特に既存のチームとの違いを強調するようになっている。構成人員が特徴的なチーム（男性だけ）や、結合契機が特徴的なチーム（インターネット仲間）や、振り付けや小道具が特徴的なチーム（水芸・南京玉簾、殺陣の取り入れ）である。その他の地域チームにおいても、企業や大学と結びつくなど多様な結合方法がみられるようになってきた。

おわりに

「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」における参加集団は、参加動機が多様で、さまざまな結合契機で編成される。既存のチームから抜けて新たにチームを作ることもでき、複数のチームに所属することもできる。また、企業・大学・地域がいろいろなかたちで結びつくこともできる。

つまり、「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」という祭りの中には、いろいろな受け皿が用意されている。多様な動機・欲求に基づく参加意思を受け入れることができ、また、さらなる集団編成へと展開する流動的な結びつきも可能である。ここに多様で流動的という都市性がみられる。流動的ではあってもそこには既存のものとは違う新たな参加意思がみられ、結果的にはそれは多様性を示すことになる。そうであるがゆえに、この祭りそのものは続いていく。ここに社会的・集団的継承性がみられる。また、独自性のある、すでに「型」ができているチームが多く、地域密着型のチームでは明らかに「伝える」意識が出てきており、文化的継承性もみられる。

また、「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」におけるチームの独自性の表出は、各チームの踊りをめぐる文化の継承のみならず、チームの独自性を競い合うことが祭りのエネルギーとなり、祭りそのものを継続させる結果となっている。特に地域密着型のチームにおいては、地域というレベルに細分化されたエネルギーが「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」全体を支えることになっているのである。

＜付記＞
本稿は、日本科学協会の助成による調査・研究に基づいて論述したものである。

<注>

(1) 高知の「よさこい祭り」は1954（昭和29）年に、戦後の経済復興と夏枯れの景気対策を目的に隣県・徳島の「阿波おどり」に対抗して、商工会議所の発案により始まった。祭りを始めるにあたって曲作りを依頼された高知在住の作曲家が、歴史のある「阿波おどり」に対抗するには素手ではかなわないので鳴子を手に持つことを思いついたという。こうして「よさこい鳴子踊り」という曲が作られ、当初は正調の曲・踊りで踊っていたが、1972年にフランスのニースのカーニバルにサンバ調の「よさこい鳴子踊り」の曲・振り付けで参加したのをきっかけに徐々にアレンジされた曲・踊りが増えていった。現在では鳴子を手にもつことと、「よさこい鳴子踊り」の曲を一節でも入れることがルールとなっている。2001年（第48回）には153チーム、約１万７千人の踊り子が参加している。

(2) これらは筆者による踊り子の結合契機からの分類である。祭りを主催する「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り組織委員会」はスポンサーの有無によりチームを３つに分けている。同組織委員会によると、チームは「企業チーム」「一般チーム」「子ども会・小学校・中学校チーム」に分類される。チーム名もしくは衣装もしくは地方車のいずれかひとつに企業名もしくは商品名が入っている場合は露出の大小を問わず「企業チーム」とみなしている。「一般チーム」はチーム名もしくは衣装もしくは地方車のいずれにおいても企業名もしくは商品名が入っていない場合をいう。「子ども会・小学校・中学校チーム」とはチーム名もしくは衣装もしくは地方車のいずれにおいても企業名もしくは商品名が入っておらず、踊り子の構成のうち70％以上が該当する会・学校の児童・生徒の場合をいう。参加費として「企業チーム」20万円、「一般チーム」５万円（「子ども会・小学校・中学校チーム」は無料）、運営協力費としてメンバー１人につき1,200円払うことが必要である。以上、「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り組織委員会」の規定である。

(3) 公式のガイドブックや新聞によると、大学名が出ているチームは20チームである。このうち企業名が併記されているものは９チームであるが、企業の名は出さずにスポンサーとなる場合があるので（軌道にのるか１～２年ほど様子をみる例がある）、企業・大学生合同チームは約半数と判断した。

(4) 「ＢＯＴＣＨ（ぼっち）」は「みちのくＹＯＳＡＫＯＩまつり」の第１回から第３回まで連続参加していたが、中心人物の卒業で自然解散となってしまったそうである。

(5) 「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」は参加人数は40人以上150人以下と決まっている。この人数には踊り子だけでなく、旗振り・声出しなど衣装を着た人すべてを含む。

(6) イクラは小学校低学年以下（35人）、稚魚は３年生以上の小学生（30人）、成魚は中学生以上（40人）、ほっちゃれは母親（40人）である。

＜参考文献＞

・小林忠雄　1990『都市民俗学－都市のFOLK SOCIETY』名著出版

・倉石忠彦　1990『都市民俗論序説』雄山閣

・和崎春日　1996『大文字の都市人類学的研究』刀水書房

・矢島妙子　2000「祝祭の受容と展開－『ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り』」日本生活学会編『祝祭の100 年』ドメス出版

・矢島妙子　2001「『よさこい』の祭りにみる地域性についての人類学的一考察」『常民文化』24号　成城大学常民文化研究会

＜参考資料＞

・ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り組織委員会監修　2001 『北海道ウォーカー別冊付録2001年6/12号　ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り2001大観覧ＢＯＯＫ』角川書店

（やじま　たえこ　文化人類学）